
家庭教師ヒットマンリボーン もう一つの闘い

炭酸コーヒー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンリポーン もう一つの闘い

【Nコード】

N7289Y

【作者名】

炭酸コーヒー

【あらすじ】

ヴァリアーとの闘いの後に行われた、ツナ達のもう一つのリング
争奪戦

もう1人の沢田来る（前書き）

上手くできるか自信がありません。

もう1人の沢田来る

ヴァリアーとの闘いから一週間後のある朝のHR

先「今日は突然だが、転入生を紹介する。入ってきなさい」

担任がそう言うと、教室のドアが開き一人の男子生徒が入ってきた。

正「鴨川中学校から来ました沢田正吉です。父の都合でこの並盛に来ました。皆さんよろしくお願いします」

皆「よろしくお願いします」

(沢田正吉? 10代目と名前が似てる…何か10代目と関係あるのか?)

獄寺は一人そう思ったが、クラスメイト達はそんな事気にもとめなかった

女達「かっこいいー!、獄寺君もステキだけど、正吉君もステキー!」

綱「あの人、オレと同じ名字だ。ま…偶然か」

だがツナはこの時、夢にも思わなかった。まさかこれからとんでも闘いが待ち受けていようとは

もう1人の沢田来る(後書き)

ひとまず第1話は終了です。次話は近日書きます

ノヴァークファミリー来る(前書き)

今回はノヴァークファミリーのボスとその守護者達が登場します。

ノヴァークファミリー来る

正吉が転入してきた日の昼休み

獄「10代目！お昼を食べてみましょう！」

武「ツナ、屋上で飯食おうぜ」

獄寺と山本がツナに話しかけてきた。

綱「うん…いいよ。」

ツナと獄寺と山本は弁当を持って教室を出ようとした。すると

正「ねえ綱吉君、僕も仲間に入れてくれないかな？」

正吉が話しかけてきた

綱「え？俺達と？」

正「ダメ…かな？」

綱「うん、いいよ！一緒に食べよう2人もいいよね？」

獄「10代目がそうおっしゃるなら」

武「もちろんだぜ！」

3人とも了承だ

正「ありがとう」

4人は屋上で弁当を食べた

放課後

リ「ツナ、帰るぞ」

綱「リリポーン！学校には来るなっつても言ってるだろ！」

獄「ご無沙汰してます、リポーンさん。」

武「よっ！小僧」

リ「ちやおっす！」

正「赤ん坊？アルコバレーノか」

「「「「「？」「「「「」

獄「おいてめえ、なぜリポーンさんのことを、てめえ何者だ？」

獄寺が正吉に掴みかかった。

武「おい獄寺！」

山本が止めに入る

すると、

女「貴様、正吉様に気安く触るな！」

他のクラスであろう背の高い女が山本よりも先に獄寺と正吉の間に割り込み、獄寺の手をはじく。

獄「あゝ？てめえ誰だ？」

獄寺は女を睨んだ

するとその女は

「私は佐永栞、正吉様の部下でありノヴァークファミリー嵐の守護者よ」

リ「ノヴァークファミリー？そんなファミリー聞いたことねえぞ」

リボーンが山本の肩に乗りながら言っ

ると栞は鼻で笑いながら

栞「当たり前だ、なんせノヴァークファミリーは二年前、正吉様が作ったのだからな」

栞が言い終わると同時に5人の生徒が入ってきた

栞「この際だから紹介しよう。まず、山形賢。属性は晴」

栞が仲間らしき人達を紹介していく

賢「晴の守護者の山形賢だ」

栞「次にナータ。属性は雷」

ナ「ちわゝ、雷の守護者ですう」

栞「次にカルジール。属性は雲」

カ「雲の守護者だ」

栞「次に柳真蒼。属性は雨」

蒼「柳真蒼だ、よろしくな。蒼って呼んでくれ」

栞「次にミスト。属性は霧」

ミ「ミスト、霧の守護者です。」

栞「そして最後に我らがノヴァークファミリーのボス、沢田正吉様だ」

正「改めて自己紹介しよう。ノヴァークのボス、沢田正吉です。」

7人の挨拶すむと、リボーンが山本の肩から降りる。

リ「そうか、礼儀正しい奴等だな。うちの奴等にも見習わしたいくらいだ」

獄「ちよっ！リボーンさん」

リ「冗談はさて置き、そのノヴァークファミリーが俺たちに何のようなんだ？」

正「簡単な話だ。我らノヴァークファミリーは今ここで、ボンゴレファミリーに闘いを申し込む」

ノヴァークファミリー来る(後書き)

やっと第2話が終わった

真の目的来る（前書き）

今回も皆が喜んでくれるか不安

真の目的来る

ラ「ツナー、ご飯じょく、早く来ないと、ランボさんがみーんな食べちゃうもんねー」

綱「分かった分かった」

ツナはベッドから這い出て、一階へと降りる。

そう、ツナは今家にいるのだ。

ここで前回の話の続きを話そう。

綱「ええええええ!!」

正「言っておくけど、君達に拒否権はないよ」

そう言つて正吉は右手を挙げる。それが合図だったのか、ミストが指をパチン!と鳴らす。すると次の瞬間、ツナ達の目の前に巨大なスクリーンが現れた。

そこには笹川京子、三浦ハルが映っていた

正「この娘達は今僕達が預かっている。返してほしいなら、僕達と闘うことだ」

綱「ふざけるな!京子ちゃんとハルを返せ!!」

菜「心配するな。沢田綱吉率いるボンゴレファミリーが、正吉様率いるノヴァークファミリーと闘いさえすれば、彼女達は返そう」

獄「卑怯だぞ!」

武「そつだ！その娘達は関係ないはずだ！」

リ「本当の目的はなんだ？」

リ「ボーンが正吉を睨みながら言う

リ「ボーンと正吉の睨み合いが続く。

正「フ…流石は最強の赤ん坊、アルコバレーノのリボーン、適わないな。いいだろう、もう一つの目的を教えてやる。それは、お前等が持つているボンゴレリングだ！」

綱「ボンゴレリング？」

リ「ボンゴレでもねえお前等が、何故ボンゴレリングを狙う？」

正「おつと、これ以上は話せないな。ボンゴレがノヴァークに勝つことができれば、教えてやる」

栞「第一戦目は嵐の守護者同士の間だ。明日の夕方5時、並盛工場の廃墟まで来い」

そう言うと、7人とも突然と姿が消えた。

綱「き…消えた!？」

獄「どういうことだ!？さっきの巨大なスクリーンといい、今のと
いい」

リ「おそらく相手の術師の幻覚だぞ」

獄「しかしどうします？ 10代目」

綱「どうするって言ったって」

リ「やるしかねえだろうな。ひとまずお前等は家に帰れ」

綱「リボーンは？」

リボーンは廊下へと歩いていく

リ「俺はこの事を残りの守護者達に教えてくる」

獄「とりあえず、リボーンさんの言つとおり、家に帰りましょう」

0代目「

武「だな」

綱「…うん」

真の目的来る（後書き）

次はいよいよ嵐戦です。

獄寺隼人VS佐永栞（前書き）

始まりました。嵐戦

獄寺隼人VS佐永栞

現在時刻は午後4時50分

この場には

ツナ 獄寺 山本 了平 クローム リボーン

ランボ デイノと部下 ビアンキ シャマル
がいる。

相手側は全員そろっている

正「ルールは簡単、先に戦闘不能になったほうの負けだ。それじゃあ第一戦目、ボンゴレ嵐の守護者VSノヴァーク嵐の守護者、バトル開始！」

獄「いくぜー！」

獄寺はダイナマイトを1つ栞へと投げた。

獄「まずは様子見だぜ」

栞「獄寺の武器はダイナマイトか、弱いね」

そう言うと栞は袖の中から鎖を取り出し、ボムを弾き返した。
ボムは獄寺の方へと飛んで行く。

獄「けっ！やるじゃねえか」

獄寺は後ろへ飛び爆発をかわす。

獄「てめえの武器は鎖か、そんなんじゃ俺のボムは、かわしきれねえぜ」

獄寺は言つと同時に大量のボムを投げる。

獄「二倍ボム！」

大量のボムが栞へと飛んで行く。しかし栞は飛んでくるボムのほとんどを鎖で弾いた。

獄「何！」

栞「だからいったでしょ、弱いつて」

獄寺隼人VS佐永栞（後書き）

次回は獄寺のあの技がでます。

獄寺隼人VS佐永栞 中盤(前書き)

続きがなかなか思いつきません

獄寺隼人VS佐永栞 中盤

栞は笑いながら鎖を構える

獄「なるほどな。なら、出し惜しみはなしだぜ」

獄寺はさつきよりも大量のボムを取り出し、栞へと投げる。

獄「三倍ボム！」

大量のボムは栞のへと投げつけられる。しかし栞は後ろへ飛び、ギリギリのところまでボムをかわす

栞「さすがはボンゴレ嵐の守護者。あれだけのボムをいっぺんに投げるとは」

栞は顔に笑みを浮かべながら言う。

獄「まだまだこれからだぜ」

獄寺はまたボムを取り出し、栞へと投げつける。

栞「この程度の数なら、何の問題もないな」

栞はそう言うと、右の袖から出ている鎖を強く握り締め、ボムを弾き飛ばそうとした。しかし、栞の鎖はボムには当たらなかった。鎖が当たる瞬間、ボムの飛ぶ方向が変わったのだ。

栞「方向が変わった？」

獄寺「果てな」

ボムはそのまま栞の方へと真っ直ぐ飛んでいき、直撃する。

シャ「出たな、ロケットボム」

ビ「ロケットボム？」

リ「そーいや、ビアンキは獄寺のロケットボムを見るのは初めてだったな」

リポーンが説明を始める

リ「ロケットボムとは、ボムに仕込まれた推進火薬で二度方向が変わる、獄寺の新技だぞ」

ビ「隼人がそんな技を」

ビアンキは向こうで戦っている獄寺を、心配そうな目で見ていた。

獄寺隼人VS佐永栞 中盤（後書き）

長かったです

獄寺隼人VS佐永栞 終盤(前書き)

遅くなりました

獄寺隼人VS佐永栞 終盤

獄「たわいもねえ…」

獄寺は髪を整えながら、ツナ達の方へと歩き出す

しかし次の瞬間、獄寺の背中に強い衝撃と共に劇痛が走る

獄「がつ！ な…に？」

獄寺は倒れそうになったが、なんとか堪え、振り返る。

武「マジかよ」

獄「んなバカな!？」

獄寺が驚くと同時に爆発による煙が晴れる。そこには両手に鎖を持ち、顔に笑みを浮かべる栞が立っていた。

獄「左手にも鎖が!？」

リ「二刀流ってわけか」

シャ「隼人のやつ、また油断しやがって。前回の同じじゃねーか」

獄「ちきしょう、もろにくらっちまったぜ。背中がいてえ」

栞「次はこっちの番だ」

そう言うと栞は両手の鎖を構える。そしてうつすらと笑みを浮かべ

栞「二刀流・乱れ鎖！」

2本の鎖が獄寺を次々と襲う
獄寺はそれをギリギリの所でかわす

綱「凄い獄寺君、あの攻撃を全部かわしてる」

シャ「だが、かわすのがやっとで反撃する隙がねえ」

シャマル達はただ見守ることしかできなかった

栞「どうしたの？避けるだけじゃ私は倒せないわよ」

獄「うるせえ！言われなくても分かってたんだよ」

(どつする、) 奴の言うとおり、このまま避けるだけじゃダメだ。反

撃しねえと。けど隙が全くねえぞつすりゃいいんだ

獄寺隼人VS佐永栞 終盤（後書き）

遅くなつてすみません

次話は近日投稿します

獄寺隼人VS佐永栞 決着（前書き）

投稿が遅くなり、すみません。

獄寺隼人VS佐永栞 決着

シャ「やべえな、敵が速すぎて、隼人に反撃する隙がねえ」

綱「このままじゃ獄寺君がやられちゃうよ！どうしようリボン！？」

リ「今の俺達にできるのは、獄寺を信じ、ただ見守る事だけだ」

了「何をやっておるか、タコヘッド！極限にファイトだー！！」

武（死ぬなよ、獄寺）

栞「どうした反撃しないのか？外野が心配しているぞ」

獄（10代目が俺のことをしてくださってる。もうこれ以上、10代目に心配させるわけにはいかねえ、何が何でも無事に戻らねえと

な)

栞「たしか嵐の守護者の使命は、常に攻撃の核となり、休むことない怒濤の嵐でしたね。これぞまさに怒濤の嵐、アナタより私の方が向いていますね。嵐の守護者に」

栞は無表情のまま、勝利を確信したかのように言い放つ。

獄(クソ、もう体力もあんま残ってねえ、このままじゃ防戦一方だ。一か八か、やってみるか)

獄寺はその場で立ち止まった。当然鎖は、動きを止めた獄寺に次々と襲いかかる。

栞「どうしたの、まさかもう諦めたとでも？」

シャ「隼人！なぜ動かない」

デイ「まさかあれを正面から受け止める気じゃ」

リ「どうだろうな、獄寺の事だ。何か考えがあることは間違いないだろう」

栞「どうするつもり、まさか本当に諦めたの？」

二本の鎖が次々と獄寺を襲う。

獄寺はそれをじっと耐える。

そして次の瞬間、獄寺が二本の鎖を掴む。

これぞまさに怒濤の嵐、アナタより私の方が向いていますね。嵐の守護者に」

栞は無表情のまま、勝利を確信したかのように言い放つ。

獄（クソ、もう体力もあんま残ってねえ、このままじゃ防戦一方だ。一か八か、やってみるか）

獄寺はその場で立ち止まった。当然鎖は、動きを止めた獄寺に次々と襲いかかる。

栞「どうしたの、まさかもう諦めたとでも？」

シャ「隼人！なぜ動かない」

デイ「まさかあれを正面から受け止める気じゃ」

リ「どうだろうな、獄寺の事だ。何か考えがあることは間違いないだろう」

栞「どうするつもり、まさか本当に諦めたの？」

二本の鎖が次々と獄寺を襲う。

獄寺はそれをじっと耐える。

そして次の瞬間、獄寺が二本の鎖を掴む。

栞「な！私の乱れ鎖を受け止めた！？」

シャ「隼人のやつ、コレを狙ってやがったのか」

武「やるなあ獄寺」

了「極限に物凄い胴体視力だ」

獄「てめえの攻撃はしのいだが、次はコッチの番だ」

そう言つと、獄寺は鎖をおもいつきり引つ張る。

栞「く！」

栞も負けずに鎖を引つ張る。

力は獄寺の方が強いのか栞は体ごと獄寺に引つ張られる。

そして獄寺はそのまま近くにあった太い柱のようなものに、栞の鎖を強引に結びつける。

栞「チツ」

引っ張っても取れないのか、栞は鎖を体から外した。

獄「これでもう武器は使えねえぜ。そんじゃ、そろそろ終わりにするぜ」

獄寺はボムを取り出す。

獄「果てな、三倍ボム！」

ボムは栞の方へと飛んでいくが、栞は後ろへ飛び、ギリギリの所でボムをかわす。

獄「この時を待ってたぜロケットボム！」

ボムは栞の方へと飛んでいく。

栞「しまった!！」

空中では身動きができないため、栞は獄寺のロケットボムを避ける
ことができない。

獄「これが嵐の守護者の怒濤の攻めだぜ」

ドカアアアン!!!

ボムが栞に直撃する。

綱「やった! 獄寺が勝った!」

シャ「まったく、ヒヤヒヤさせやがって」

武「よし！」

了「極限に勝利だー！」

獄「ボンゴレなめんじゃねえ」

煙が晴れると、そこには朧が倒れていた。

正「決まったな。今回のバトルの勝者はボンゴレ嵐の守護者、獄寺隼人」

正吉が朧と獄寺の間立って大声で言う。

正「なお、次の闘いは明日だ。対戦するのは雷。場所は並盛神社だ。」

そう言つと正吉は栞を抱え、爆風と共に姿を消した。

獄寺隼人VS佐永栞 決着（後書き）

嵐戦、獄寺VS栞の戦いが終わりました。

次は雷戦。

ランボVSナータの戦いです。

それではまた次話にお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7289y/>

家庭教師ヒットマンリボーン もう一つの闘い

2011年12月23日03時55分発行